学校事例②

静岡県立池新田高校

学ぶ楽しさ、出来る自分を知り目標に向かい努力できる自信を育む

長年にわたる生徒指導の課題を克服し、基礎学力向上に取り組んだ静岡県立池新田高校。小・中学校の学習内容の学び直しを通じて達成感を味わわせ、将来に向けた目的意識を持たせることで、「自分にも出来る」「やらなければいけない」という意識を育んでいる。誰のための学びなのかに気付き、自信を深めた生徒たちは、積極的に自らの進路を切り拓こうとしている。

全ての生徒が出来るようになりたい

静岡県立池新田高校は、御前崎市西部の遠州灘を望む浜岡砂丘近くに位置する公立高校である。今は落ち着いた校風の同校だが、かつては遅刻者が多く、服装や頭髪などの指導に困難を極めた学校だった。こうした状態を改善しようと、教師全員の共通理解の下、一丸となってチケット制による風紀指導に取り組み始めたのが10年前だ。導入当初は生徒や保護者からの反発があり、簡単には軌道に乗らなかった。しかし、生徒や保護者との対話と粘り強い指導により、数年で学校は落ち着きを取り戻した。

同校が次の課題に挙げたのは、基礎学力の定着だ。「素直で礼儀正しく、教師の誰もが太鼓判を押すような生徒でも、いざ就職試験に臨むと学力不足のために内定をもらえないことがありました。経済不況により採用が抑えられた影響もあったと思いますが、そうした例を見るにつけて、生徒の進路を保証するためには基礎学力の向上が欠かせないという認識が教師の間に広がっていきました」と、進路課長の村井秀宣先生は語る。

同校では、大学・短大進学希望者は全体の2割弱で、約半数は就職希望者である。現3年生を例に、生徒の学力状況をベネッセの学力指標（＊）で見ると、約140人中、A2～Bゾーンが20人弱、残りがC～D3のゾーンに集中する、いわゆる洋ナシ型の分布となる。小・中学校時代に学んだ基礎的な知識が身に付いていない生徒も目立ち、中には数学の四則計算や英語のアルファベットを間違える生徒もいた。そうした生徒の基礎学力の低さを踏まえ、黒

静岡県立池新田高校

◎1929（昭和4）年、笠南農業補習学校として開校。校訓は「礼譲・勤労・協同」。大学進学を目指す進学類型と、専門学校・就職を目指す普通類型がある。
◎形態／全日制、普通科、共学
◎生徒数／1学年約160人
◎13年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は筑波技術大に1人が合格。私立大は國學院大、東海大、明治大、立教大、早稲田大、中京大、名城大などに延べ34人が合格。他に、短期大5人、専門学校46人、就職94人。
◎住所／静岡県御前崎市池新田2907－1
◎電話／0537－86－2460
◎URL／http://www.ikeshinden-h.ed.jp/

＊生徒の学力到達度を＜S＞～＜D＞ゾーンで示す。A～Bは国公立大・難関私立大から私立大レベル、Cは4年制大レベル、Dは基礎力養成レベル。

学力多層化を踏まえて考える主体性の育成

静岡県立池新田高校教頭
黒田 武 くろだ・たけし
教職歴33年。同校赴任歴2年目。「これからも、人の心、自分の心を大切に生きていきたい」

静岡県立池新田高校
久米加寿隆 くめ・かずたか
教職歴23年。同校赴任歴8年目。教務課長。「『分かる』ことは楽しいことと生徒に伝えたい」

静岡県立池新田高校
村井秀宣 むらい・ひでのぶ
教職歴19年。同校赴任歴8年目。進路課長。「無から生まれる創造はない。結果が出るまで手を尽くす」

静岡県立池新田高校
白松英憲 しらまつ・ひでのり
教職歴10年。同校赴任歴7年目。3学年主任。「この道より我を生かす道なし。この道を歩く」

静岡県立池新田高校
戸塚雄介 とづか・ゆうすけ
教職歴8年。同校赴任歴8年目。生徒課。「コミュニケーションを大切に、生徒と信頼関係を築きたい」

静岡県立池新田高校
鈴木俊輔 すずき・しゅんすけ
教職歴3年。同校赴任歴3年目。2学年担任。「モットーは、堅実に、そしてチャレンジングに」

田武教頭は次のように話す。

「1年生と話していると、『先生がきめ細かい声掛けと丁寧な指導をしてくれてうれしい』という声をよく耳にします。どの生徒も分かりたい、出来るようになりたいと思っている。だから、分からないことは分からないと言える、安心して参加できる学びの場が大切だと感じています」

ポイント1 学び直しで基礎学力と自信を育む

分からないことの上塗りはせず学び方を教える

基礎学力の向上のために、同校では1・2年生を対象に、教師全員の共通認識の下、小・中学校段階の学習内容の学び直しを行っている。教材は、ベネッセの「マナトレ」だ。国語・数学・英語の3教科にそれぞれ基礎編（10～7級）、標準編（6～4級）、挑戦編（3～1級）の3コースがあり、級ごとに10枚のプリントが用意されている。現3年生が1年生3学期～2年生1学期の時に、国語・数学・英語の基礎編を試行的に実施し、12年度から導入した。

学び直しの重視は、学校全体で立ち上げた組織「基礎学力向上検討委員会」が方針として定めたが、具体的な方法は学年に任されている。学年の考え方や教師の個性に応じて柔軟に指導を変えて、学年の良さを最大限に引き出した指導を行うためだ。

現1・2年生では、授業で「マナトレ」を使う。教科担当が生徒の様子を見ながら活用しており、週2回、授業で10～15分程度を使って実施する場合が多い。授業中に行うと、教師が生徒の取り組みを見て、つまずいているところを解説しながら進められる利点があると、教務課長の久米加寿隆先生は話す。

「朝学習などで自主的に取り組ませると、どうしても手が止まってしまう生徒がいます。勉強なんて分からないと諦めている生徒に出来ない体験を繰り返させたくない、分からないことの上塗りをさせたくないという思いで、学び方も教えながら授業で行うことにしました」

生徒が「まなとれ先生」となり皆で学び、高め合う

現1・2年生では、各級が終わると教師自作の確認テストを実施し、定着度を測っている。確認テストはLHRなどに行い、不合格者は放課後に、合格するまで何度も再試験を受ける。最後の2、3人になると、担任や教科担当が1対1で指導することもよくある。2学年担任の鈴木俊輔先生は次のように説明する。

「生徒にとっては自分が理解しながら問題を解いていくことがうれしく、合格のたびに自信を深めていく様子が見て取れます。入学当初、半数以上いたD3の生徒が、1年生2月には数十人まで減りました。『外部のテストでもきちんと結果が出ている。勉強すれば確実に自分の力になる、やれば出来るんだ』と生徒たちに伝え、自信を持たせるように意識しています」

失敗体験を繰り返させず、出来る喜びを味わわせること、必ず全て理

解して終わらせることで、学ぶ楽しさと共に、壁にぶつかった時も乗り越えていこう、新しいことに挑戦していこうという意欲を持ってほしいと考えている。

一方、現3年生が1・2年生の時には、図書課の理解を得て、朝読書を行っていたSHR前の15分間に、毎朝「マナトレ」を実施した。1～2日で1枚のプリントに取り組み、10枚目のステップ10を「確認テスト」として定着度を測る。基準に達しない生徒には、放課後に再試験を実施。日々の学習の管理やテストのチェックは担任が行いながら、再試験で最初に合格した生徒を「まなとれ先生」に任命し、再々試験を受ける生徒の指導に当たらせた（図）。試験の答案を見て丸を付け、分からない生徒に教えるのが役割で、この役を務めたいために1番で再試験を突破しようと頑張る生徒もいたという。

1・2年生でこの制度を実施していた現3学年主任の白松英憲先生は、成果を次のように語る。

「問題が解けたという喜びだけではなく、自分が教える立場になることで、更に自信を深めさせるのが狙いです。個人の学力を高めるだけではなく、安心して『分からない』と言えた上で、皆で学ぼう、良くなろうという雰囲気や、生徒が主体的にかかわる意識を醸成できました」

ポイント2 自分の将来や進路を描き目標を持たせる

なぜ必要なのかを自ら考え、気付かせる

自分の将来とそのための過程を思い描かせることも大切にする。

「生徒は、自分のこととして捉えられてはじめて、自ら取り組むようになります。ですから、普段から取り組みをする前に、なぜ必要なのか、それをすることでどういう自分になれるのかを生徒自身が納得できるようにしています」（鈴木先生）

かつては校内の風紀改善を目的としていた生徒課の指導も、現在では生徒の進路実現を目的としている。生徒課は進路課と連携して自分の希望進路を実現するために何が必要かを問い掛け、自分で気付かせることを重視する。生徒課の戸塚（とづか）雄介先生はその意図を次のように説明する。

「例えば、身だしなみ指導では進路を意識させるため『その身だしなみで就職試験や面接会場に行けるのか』『会社は今の自分を採用すると思うか』と生徒に問い掛けています。将来、社会で活躍するためには何が必要なのかという観点で生徒自らが考える形にすることによって、自己を律していくだろうと考えました」

自分の努力が将来を拓くことを信じさせる

考えさせる指導は、進路学習においても同じだ。進路学習で自分のなりたい職業や入りたい企業を調べさせたり、外部から講演者を招いたりして夢を育む中で、自分はどうすればよいのかを考えさせる。「マナトレ」などの日々の学習活動も、服装や頭髪などの生活態度の改善も、あらゆる活動は全て自分の将来に通じていることを、日常的に意識させている。

時には、「D3のままでは、高校は卒業できても、社会では誰も相手

図　「まなとれ先生」体験記

「マナトレ」は、最初は気が進みませんでした。しかし、何回も取り組むうちに自分でも驚くほど簡単に思えてきて、楽しくなりました。中学校までの復習が多かったのですが、数学などは単純な計算ミスをすることも多くて、高校で学び直しをする意味も実感できました。再試験の時もありましたが、基礎学力が身に付いてよかったと思いました。また、再試験の時に「まなとれ先生」をしたことは楽しかったです。普段、先生方が使っている机で採点をするのは楽しかったし、教えることで更に理解が深まったと思います。

成績優良者にも3年生でなれました。高校では中学校の時よりも授業をちゃんと聞くようになりました。勉強が出来ない時は勉強なんかどうでもよいと思っていましたが、出来るようになってからは小さなミスが気になるようになり、次も頑張ろうという気になれました。将来についても考えるようになり、今は希望進路を実現させるために頑張っています。みんなで取り組んだ「マナトレ」という実感があってよかったです。基礎学力が身に付いたと思います。（進学志望の3年生の体験談より）

生徒が親しみやすいように、白松先生は「まなとれ」と平仮名で表記。再試験で最初に合格した生徒は「まなとれ先生」となり、再々試験の採点や、分からない生徒への説明をする。その役に就くことは再試験の目標にもなっている

にしてくれない。進路なんてないぞ」と生徒にあえてはっきり告げて、危機意識を持たせる。逆に、Cゾーンになれば、どれだけ進学先・就職先が広がるかを、具体的に学校名・企業名を挙げて示す。自分の頑張り次第で将来が拓けることを伝えて、目的意識を芽生えさせるのである。鈴木先生は次のように述べる。

「何をいつまでにしなければいけないかを認識させて背中を押せば、生徒は自分で走り出します。2年生のインターンシップは、参加を強制しませんでしたが、就職希望者全員が参加しました。自分のために何が必要なのかを主体的に考えて、決めたのだと思います」

ポイント3 自己肯定感を高め次への努力を促す指導

言葉を選び段階的に褒めて生徒に成長を実感させる

生徒に考えさせる指導の土台には、生徒の頑張りを認め、自己肯定感を育む指導がある。

「中学時代に成功体験が少ない生徒は、自己肯定感が低く、自分に自信がありません。だからこそ、教師が生徒一人ひとりをよく見て声を掛け、出来たことはきちんと褒めることで『自分にも出来る、次も頑張りたい』という意欲が育まれると考えています」と村井先生は話す。

学期ごとの成績優秀者と共に、得点は高くなくても、過去よりも大きく得点を伸ばした生徒を「躍進賞」「伸びた賞」として表彰する。生徒指導においても、学期ごとにクラスのチケットの枚数を集計し、少なかったクラスを称える。クラスの仲間と一緒に頑張って認められるという体験が、集団への帰属意識や、「自分にも出来る」という気持ちを育むのである。

段階的に褒めることも意識する。例えば、入学直後は遅刻ばかりしていた生徒が、時間前に集合できるようになったとする。最初は褒めるが、2度、3度と続けば同じように褒めたりしない。「今の君たちなら、それは出来て当たり前、次はもっとこういうことが出来るようになってほしい」と言い、更に高いレベルを求める。戸塚先生は、「生徒が自分の成長を感じられるように声を掛けながら、もっと上を目指したいと思う言葉を選ぶことを大切にしています」と述べる。

2年生の指導でも、3年間を見据えた段階的な指導を意識する。

「『一生懸命に頑張る生徒には最大限の支援をするが、努力しない生徒には手を貸さない』とあえて生徒には伝えます。教師との信頼関係を築いてきた1年生の指導を土台として、自分を信じて、努力できる生徒を育てたいと思うからです」（鈴木先生）

基礎学力向上に着手して2年。B3ゾーン以上の生徒が大幅に増え、D3ゾーンの生徒は激減した。年2回、小・中学校の先生を招いて行う授業公開では、「池高マジック」という言葉も聞かれた。落ち着いて授業を受け、学びに向かう生徒の成長した姿に、小・中学校の先生方は目を細めた。

また、進路行事に意欲的に取り組む生徒が増えた中で、一般入試で国公立大や難関私立大を目指し、早稲田大などの合格を勝ち取る生徒も現れ始めた。地域を支える人材を多く輩出する同校だが、東日本大震災後には、原子力関係の仕事に就いて地域を守りたいと、その資格を持てる東京消防庁への試験に挑み、その職に就いている卒業生もいる。

「『生徒は絶対に出来る』という熱い気持ちを教師が持っていることが、本校の強みです。生徒の情報は日常的に共有しながら、良さそうだと思った取り組みはすぐに実践する柔軟さはこれからも大切にしていきたいと思います」（久米先生）

「どの生徒も、良い社会人になりたい、他者の役に立ちたい、そのために勉強も出来るようになりたいと純粋に願っています。学校や教師を信じ、目標に向かって生徒同士が学び合う環境が出来てきた今、本校はもっと良い学校になると信じています」（白松先生）